

歴史公園における複数館相互活用にむけて —平城宮いざない館と平城宮跡資料館での試み—

1 はじめに

2018年3月24日の国営平城宮跡歴史公園の開園とともに、公園のガイダンス施設として平城宮いざない館（以下、いざない館）が開館した。同じ平城宮跡の展示施設である平城宮跡資料館（以下、資料館）との役割分担について今後の展望を見据え、来園者の相互往来を促進すべく、教育普及の一環としての共同企画を実施した。両館共通の展示物を結び付ける視点で、資料館の企画展に関連する体験型展示・ワークシートをいざない館で実施・配布し、平城宮跡資料館へと誘導するという取り組みを期間限定で実践し、一定の集客と歴史公園来園者の移動を促すことができた。

2 夏期企画展での相互企画

夏のこども展示「たいけん！なぶんけん」 2018年度の夏のこども展示は、「文化財研究所の職業体験」というコンセプトのもと、奈文研で日常おこなわれている調査研究が、どのように進められているのかをこども向けに紹介する内容であった。考古学的な用語や手順をわかりやすく解説するとともに、発掘調査の必需品＝「野帳」をモチーフにしたワークシート型のリーフレットを各所に配し、研究者がどういった視点で歴史を復元していくのかを追体験するような工夫をおこなった。

会場で目を惹くように意識したのが、実測図を原寸大で貼り合わせた壁展示である。研究の基礎資料となる手書きの実測図は、一般に公開される機会はほとんどなく、研究員を身近に感じられる資料と言える。その実測図の対象に選んだのが、内裏北外郭官衙の調査で検出された廃棄土坑SK820である。



図47 SK820をテーマにした展示－研究資料とジオラマ－
(左：平城宮跡資料館 右：いざない館展示室4「時をこえて」)

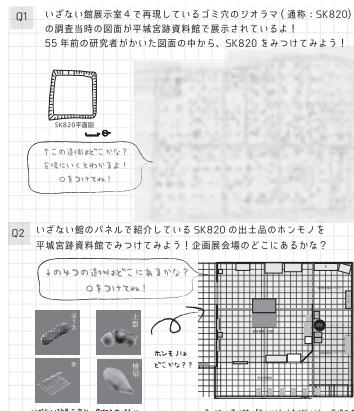
いざない館から資料館へ

—SK820のジオラマ・実測図・出土遺物をさがせ！—

1963年に発見されたSK820は、木簡の調査研究と保存方法の確立の契機となった重要な遺構である。ここから出土した木簡群が国宝に指定されたことは記憶に新しい。平城宮跡の研究の象徴として、また、奈良時代の遺物が投棄される様子を一般の方にも伝わるよう、いざない館展示室4の入口すぐにジオラマで表現されている（図47）。

このジオラマの元となった「調査当時の図面が平城宮跡資料館で展示されている」ことをいざない館で宣伝するとともに、「55年前の研究者が描いた図面の中から、SK820をさがしてみよう」という課題を記したワークシートを配布した。また、同遺構から出土した遺物の「本物」を、資料館の企画展会場でさがしてもらう問い合わせも設けた。

結果、いざない館配布のワークシートを携えて、資料館に来訪し解答してくれた来館者は、連日の猛暑にもかかわらず、49名にのぼり、両館の往来に一定の効果を得ることができた。対象者の多くは、夏休みを過ごす小学生の親子連れであった¹⁾。



なつやすみワークシート
(鬼瓦と祭祀遺物のマグネット)

秋のおたのしみワークシート
(荷札木簡ハガキ)

図48 両施設の展示をリンクさせたワークシートとノベルティ



図49 いざない館における平城宮跡資料館「地下の正倉院展－荷札木簡をひもとく－」に関連した参加型展示
(左:来館者の出身地 中央:「荷札木簡」参加型展示 右:来館者それぞれの「木簡」)

3 秋期特別展での相互企画

「地下の正倉院展－荷札木簡をひもとく－」 秋の恒例となった「地下の正倉院展」は、平城宮跡資料館で開催する他の企画展と比較して、遠方からの来館者が多い企画展である。そうした全国各地からの来場者に、木簡にもっと親しみをもってもらうことをコンセプトに、2018年度は全国から送られた荷札木簡をテーマに展示を企画した。例年、本展の来場者は年齢層が高い傾向にあるが、来場者の見知った地名、地元の特産品なども含む荷札木簡は、こどもたちが木簡に興味をもつききっかけとしても有効と考えた。会場には、全国各地から都に送られた産物を記した巨大パネルや、五畿七道各国の木簡を紹介する展示もおこなった。

こどもも大人も楽しめるワークシート 企画展の難解な内容を、わかりやすく伝えるため「旧国名のいろぬり」、「木簡と産物イラストの線つなぎ」、「荷札木簡テーマのクロスワード」で構成するワークシートを考案し、共通のものを両館で配布した(図48)。解答を資料館に持参した方に、ノベルティとして木簡ハガキを進呈する取り組みを実施し、秋の遠足・行楽シーズン、奈良国立博物館の正倉院展の影響もあってか、計512名の来館者の手にノベルティが渡ることとなった。

荷札木簡に関連した参加型展示 奈良時代の荷札木簡の世界を、現代的に疑似体験することで、一般の方にも遊びながら理解してもらえるような参加型展示を2種類企画し、いざない館で実施した。

一つは、来館者の出身地とその特産品を考えてもらい自分なりの「荷札木簡」を作成してもらうものである(図49中央・右)。貼付用に準備したボードには、「美濃国 栗きんとん」、「滋賀 ふなづし」、「浜松 うなぎパイ」など、来館者それぞれの出身地にちなんだ木簡で埋めつくされた。荷札木

簡は「地名」や「産物」が書かれたものだった、と疑似体験を通じて来館者の理解を促すきっかけになったと考える。

二つ目は、現代の平城宮に全国各地のどこからどちらの人が訪れているのか、来館者に出身地のシールを貼ってもらい可視化する遊びを楽しんでもらった。それと同時に、「奈良時代の平城宮に全国からの荷札が集中していた」という情報や、「SK820から出土した木簡の数をこえることができたのか?」という問い合わせを投げかけることで、遺跡から出土した木簡の多さについて、関心の薄い対象者にも印象付けることができたと考える。

4 おわりに

両館で共通する内容の展示を生かし、相互の往来を促進する試みを実施し、一定の効果を得ることができた。また、夏休みの親子連れ、木簡展のリピーターにも興味をもって観覧してもらう企画についても反響が大きかった。両館で関連する展示を、「レプリカ・ジオラマ」:「本物・研究資料」という視点でみることで歴史の復元の難しさや研究者の苦労を伝える手段となり得る感触も同時に得ることができたと言える。

いざない館を訪れる観光客は、必ずしも歴史への関心が高いとは限らない。様々な見学者が見込まれるガイダンス施設であるからこそ、専門的な世界を忠実に伝えるだけではなく、学術的要素を咀嚼した断片から、当時の営みを感じてもらうことが役割になるのではないだろうか。

今後は、学校団体の利用状況を踏まえたうえで、歴史公園における文化財の活用のあり方について、教育普及の面から検討していきたい。
(廣瀬智子・座覇えみ)

註

- 1) 平城宮跡資料館における夏期企画展会期中(37日間)の入館者数は、9,205人、秋期特別展会期中(38日間)の入館者数は、15,853人であった。